

千日から高津へ

船本茂兵衛

千日墓

千日前の雑沓を抜けてノートを懐中に、疲れた足取りで南へと新金毘羅さんの前迄来るとフット足が止まる。神社の向ひ北東角を引廻した板塀（元南座の跡）の外側にさゝやかに祭られた一石碑——路傍に曝された小さい墓石一基、寂しさうに行人を凝視して居る。主は誰、それは余りにも哀憐を唆る。

見れば正面には「南無妙法蓮華經」の題目を刻み側面に「隨法院妙智日滿」「清林、九日」「了性、八日」「妙清、廿九日」などあり、正さしく法華宗の墓である。

幾月も塀外に無様に打捨てられて居つた此界限より近頃出現の無縁墓、今は特志家がせめて一時でも假りの祭壇に佛華燈明が供へられて居る。あゝ今日は九日だとすると「清林」といふ人の命日だ。探墓の門出に何かの法縁といふか、しばしは佇立手を合す。さて世は有爲轉變、榮枯盛衰の定則は止めどもなく流れつゝある。そしてネオン映ゆる歡樂のオアシスを生んだ遠き過去の千日の三昧を憶ふ。

元和の昔、城代松平忠明が市中の墓地を整理するに當り大體に於て天蓋以南、下町方面のものを下難波領の千日へ移して一大共同墓地を築かせられたのである。後に此を千日新地と稱す。

阿部野墓地へ行くとその後發掘された無縁墓石が祀られて居る。天王寺超願寺や河内あたり迄運ばれて行つたものもある。其無縁墓の畔に「千日前横井座地下無縁追福之碑」が建つて居る。それから千日墓所時代を表徴する石造迎佛二基一對を見ることが出来る、六地藏はどうなつたらうか。此度の踏査で阿部野に其一部二體があることを發見した。尤も千日前の古い寫眞に撮つてある六地藏とは少し形態を異にして居る。然らば何故にこれが千日六地藏かと云ふに、去る昭和六年三月東洋劇場（今大阪劇場）から出土した地藏の一體が御藏跡町に遷祀されて居るのを調べると像の兩脇に「千時延寶六戊午年十二月十二日、造立施主石屋甚兵衛尉兼繼」の銘がある。阿部野の地藏にも同一銘がある。のみならず石質様式形容等も總て同じで此三體を合すと六地藏の内のものである事は疑ひのない所である。若し他の三體を發見さるれば六地藏が揃ふ事になる。或人は千日の六地藏は外國人に賣拂つたと云つて居る。事實とすれば賣拂つたのは古寫眞に見る六地藏の方だつたらうと思はれる。

其他阿部野にあるものは梅原君の稿に譲る。自分は七墓の内千日及高津墓を擔當したのであるが前述の通り千日墓は廢絶し高津墓亦其姿を消して了つて、今日探墓の由なきも現在の状態によつて其附近を踏んで見ることにした。踏査と云つても僅かの時間を割いて出掛けただけで勿論考察の余裕もなく紙數にも限りがあるので本稿は單なる素見記であるから其積りで

安井九兵衛が各所の墓地を纏めて千日に墓所を設けたのだといふ墓域を現在の場所に引當てると、まづ竹林寺から南へ大阪劇場邊の間に所在したと想像すればよいだらう。尤も南方には千日六坊があつたし、それから焼場の建物、北方には刑場があり一概に千日といへば「お寺」と「しをき場」と「葬式の禮場」と「やき場」と「墓場」のカクテルであつたのだ。

千日墓所は今の阿部野に匹敵すべき代表的墓所であつた。從つて有りし頃の七墓の内でも首位にあつたことは云ふまでもない徳川時代に存在して貳百五十年、明治時代に至つて六年七月火葬廢止令の發せらるゝや火葬場の撤去と共に、埋葬は寺院墓域のみに於て許すことゝなつた。續いて七年三月天王寺に新墓（阿部野）が創設せられたので永い歴史の千日墓所も終に廢止の機に立至つたのである。かくて千日の墓は阿部野へ持ち運ばれた。だが實際今日、此時代の墓がどれ程阿部野の地に残つて居るだらうか。其多くは無縁のものとして無造作に片付けられて了つたのではあるまいか。厄介視されて地下に埋めて了つたのか、無法にも家の根石として調法がられた爲めか、最近千日前各所の地下工事に掘り返へされて再び世に出る墓碑の尠くないとは……

千日前がまだ南海通り邊から南へ道路のなかつた時分、その突當りに南鏡園といふ可なり大きな料亭があつた。庭園に泉水もあり此附近では相當なものだつたと聞く。其新築に際し地盤の仕事に廻りかゝると、こはいかに、出るは出るは墓石や骨片、體觸など散々と現れて當事者が其始末に弱つたといふ。此廻返しにより此一帯に、こゝしたものが埋めてあることを世人一般に始めて知り

千日附近を廻るに當つて幸ひ其時代の寺が遺つて居る。即ち眞邊俱利伽羅東裏（河原町一丁目）の松林庵、其北東角（阪町）の自安寺、西筋向ひ（難波新地二番丁）の竹林寺、それから北（難波新地一番丁）の法善寺等である。

松林庵墓地内安井道頓・道卜の墓（船本操影）



先づ松林庵から巡つて見ることにする。

松林庵 創立年代は不明であるが古くより眞言宗三津寺の支配下にあつた。庵主馬上氏の話によると此地面は或檀方の寄附になつたもので、凡そ八十年前前に三津寺にあつた墓も茲へ移したのだといふ。三津寺に事實上合併したのは明治四十五年南燒の後開

もなく大正三年からである。以前相合橋筋は松林庵の處で突當りであつた。此辻を「ひげそりの辻」と云つた。明治廿年代であつたか、難波村の津和氏の寄附により南へ通過となつたもので、更に東の筋迄一筆の地面だつたのである。音羽屋の下屋敷も此東寄りにあつたので音羽屋筋といふ字名が残る。南境後市電の道路敷となりそれだけ墓域が狭くなつて居る。

墓への通路が縦横に廣く取つてあるので何となく気持ちよく、整然とした落付きがある。其中央の通路を西へ見透して塀前に道頓道下の五輪塔が見える。中央に「先祖累代墓」左右に「安井道下居士」「安井道頓居士」とある。大阪金石史に詳細紹介され居るから刻文の採録を省く。但し金石史に記載のない贈從五位の四字が道頓道下の肩書に白い石の生地を露はして新しく光つて居る。東へ寺院關係の五輪塔がズツと列んで居る。其前が無縁塔である。正面の南前に次の記文ある常夜燈石が建つて居る。

これは「ひげそりの辻」の街路にあつたもの。

(右側面) 不斷夜のゆきゝの 再建 萬大 熊龜金
ためや一燈し 世話人 床能

(左側面) 世話人 玉地 難地 富指 平松
鳥安 九鳥 烏金

(背面) 千時弘化三年丙午年仲夏吉辰日建之

無縁塔中には随分古い墓石がある。左の如きものも其一つであ

○(北向前面)

明曆三丁酉年十三回忌 南無阿彌陀佛 釋尼妙意
五月五日
道の南寄りに市川銀十郎の墓がある。墓石には「市川二代目銀十郎建之」とあり。

○(東向前面)

「梵字」 關有秀山信士
關室妙秀信士

(右側面)

文政十二年

「梵字」 關山自芳信士

十一月廿四日

増林といふ人の墓石の横に

○ 犬猫墓

ます林

と石は小さいながら愛猫犬家らしいのが眼を惹く。異形のものとしては、淳信院釋鏡光信士とした蓮狀の墓はあまり類型のないものであらう、柱石が蓮の軸、其上に葉形の笠が載る。花立は蓮の果實になつて居る。

庵室の西横に辨天さんを祀つた祠堂がある。堂前の石燈籠には

○ 奉寄進

十一月十八日

とあつて金輪以前の墓らしい。

大和屋音羽といふ人の受買のための地蔵像は子供にふさはしくて可愛い。又經文らしい文句は有難い。側面に「享和三友霜月十一日」とある。

(西向前面)

地蔵名字人若聞 乃至見像瞻禮者
○ 清月淨光童子
香華衣服飲食奉
供養百千受妙藥

庵室の入口前に千切地蔵と身代矢受地蔵の標名が二本立つ。

○前 面) ちきり地蔵尊

(右側面) 千切地蔵尊 大阪天満 施主 間宮氏
石工 吉兵衛

(左側面) ちきり地蔵尊 光林寺 惠戒代

(背面) 安政二乙卯年六月

○南向前面) 身代矢受地蔵尊 遍正山 光林寺

(右側面) 施主 大坂住人 象牙屋九衛

(左側面) 寶曆七丁 丑二月吉日

寛保三癸亥七月十九日

(背面) 「梵字」 頓譽教圓 「梵字」 教岳智音

寶曆五乙亥八月十七日 正月十六日

按ずるに千切地蔵は元上住吉町一五四番地——住吉神社鳥居東

千日から高津へ



自安寺堂裏煉瓦塀にまたれ地墓に殘る浄曲界有名
な初代竹本麓太夫の墓(向つて右の端) (船本掲影)

残つて居るさうであるが、尊像は三津寺へ遷されて居る。

身代矢受地蔵も光林寺にあつたが、尊像が今どこにあるか不明

である。元生五十坊の内持寶院の墓が茲に移されて居る。

其他併優麗笑の墓もある。

自安寺 日蓮宗蓮登山の號あり、寛保二年創立後三年目に炎上更に安永四年、明治七年、同十一年、同四十五年と數度の罹災のため本堂庫裡も比較的新しい。相當境内も廣かつたが四十五年の南燒のため松林庵と同じく切取られて、今は三百八十余坪の面積となつて居る。其頃は西の門から這入つて東の坂町へ通り抜けが出来て、通路の細い露路の兩側にボンヤ(待合)が並んで居り、入口に眼隠しがあつたので晝でも薄暗い處であつた。墓は妙見堂の西裏手に十三基許りがあるだけ、ジメ／＼とした陰鬱な場所だ。

其内で次の如き墓がある。(北の端から順に)

○豊竹籠太夫 (花立) 日本因會

(左側面) 享保三癸亥五月建之

臺石前面には小野太夫、江戸鶴太夫、巴太夫、カハチ要太夫、笥太夫、泉太夫、生駒太夫、袖太夫、イセ鹿太夫、湊太夫、伊勢太夫、橋太夫。左側面にはハリマ姫太夫、鳴戸太夫、陣太夫、百合太夫、高松實太夫と各太夫の連名がある。臺石右側面にはまだ太夫の名が有ると思ふが隠れて見えない。次の卯之丸は嘩方ならん。

○釋尼妙光 (線香花立) 高 尾川ふじ建之

○花房卯之丸墓

八瀬海軍院日航聖人 十三普通院日周大徳 九祖 十四祖觀妙院日正上人 十祖通玄院日壽上人 十五祖心鏡院日行上人 十一准通了院日惠上人 十六祖大乘院日桂上人

(背面) 文化七庚午冬十一月 八土傳燈日航再建之

○(西向前面及兩側面) 南無日蓮大菩薩

(背面) 四百五十歳忌享保十六辛亥十月十三日 其傍の燈籠の棹に寺内數石寄附者の名を刻す。

天保十一年庚子七月建之 惣數石願主 中村富十郎 南燒迄同寺にあつた二代目觀雀の墓は今檀寺の高津中寺町常國寺に移されて居る。

竹林寺 淨土宗で山號は松園山、正保二年開創、享保十八年に燒けたので寶曆七年の再建になるものである。

毘沙門不動堂と地藏堂の建物のために墓地が西と東に中斷されて居る。東墓地は門前の朝日餅店の南隣り堀内の狭い處にありて墓も僅かに七基のみである。

離寛及大谷友右衛門二人の役者の墓がある。

○(東向前面) 顯覺相願瑠寬信士

(背 面) 文政四年辛巳九月廿七日歿

(臺 石) 岡嶋屋

(臺 石) 金橋樓

(玉垣石前面) 南區宗右衛門町八十六番邸 嵐橋三郎

千日から高津へ

明治十四年十月卅一日

(右側面) 圓輝菴妙清日操信女 俗名 大木戸清八之墓 (力士)

(左側面) 照住 文久三歲亥正月十三日卒行年六十三季 富山善七建之

境内東南隅堀沿ひに左の三基の碑が建つて居る。(南端より順に)

○(西向前面)

不肖善吉薩達磨教會長 故釋風運上人聞法運經 書寫功德則明治廿八年 秋立誓願法運經一部八 卷四七品六萬九千三百 八十四字書寫一石一字 今于茲成就而本願本塔 建立希願善男善女如我 等異起誓願法華弘通大

(背 面) 法華經一字一石

(背 面) 維時明治卅五年壬寅年四月建之 中道院日達居士 中田善吉 妻もと 伴喜三郎

○(西向前面)

當寺 開山 慈光院日充聖人

(左側面) 中興義察院日道聖人 三祖了達院日義聖人 四祖志善院日定聖人 八祖善妙院日觀大徳 六祖志玄院日秀大徳

七祖通光院日達聖人 十二祖通妙院日廣聖人

(五ヶ所) 南區三津寺町二〇八番邸 岡嶋家事 岡の家

俗名 毛 登

俗名 大谷勘十郎

元祖大谷友右衛門

秋譽涼風月澄信士

釋教誓

釋妙圓

二代目友右衛門

(臺石ニニ代目) 善妙友友

(友右衛門トアリ) 釋了

○(西向前面) 釋友 榮 此 榮 尼 貞 心 朴 道

(臺 石) 萬作改 大谷友右衛門

三代目 男 友松建之

此狹苦しい處に不調和な馬鹿に高い碑はと見ると、高橋卯兵衛といふ人のものである。有名な饅飴屋など食味關係者の連名があるので記して置く。

○(北向前面) 高橋卯兵衛碑

覺應真正信女

(左側面) 仁山義道信士
正室貞壽信女

(臺石上段前面)

高津山吹
岩井龜之輔
神港(丸小)本店
小島貞吉
寺町角 千代倉
日本橋三 丸 藤
本町 市 山

(臺石上段左側面)

饅頭店 京 與
本町 於 福
岡崎橋 高 砂
堂島 吉 野 山
堺筋 高 砂
中筋 梅ヶ 枝
九條 吉 川

(臺石中段前面)

東洋樓
鰐淵興平
施主
高橋丑之輔

(線香立)

三軒家新屋
堤 伊 吉
船津橋
荒井光藏

その前方に俳人鼎居の横形自然石の句碑が積石の上に据へてある。句に曰く、「蓮の香やしはし浮世を忘る時」、法名西譽菴鼎居遊歡居士。明治十七年八月廿七日歿。十八年五月一水庵荷村の建てたものである。

西の墓は本堂の南横にあり、墓地の整理はよく行届いて居る様である。

元和七年から寶永八年に至る三十九萬餘人の追薦碑がある。四面にある刻文を掲げる。

安永七戌戌年霜月日
○(東向前面)「梵字」當古墓無雜精靈等
當住實譽眞察造之

(背 面) 竹林寺中興圓蓮社通譽文達代
一夜弔成

元和七年ヨリ
寶永八年マデ

(右側面)「梵字」亡靈三十九萬千二百二十人追薦

(左側面) 常念佛二萬日供養塔
四月十五日

西部に土盛りして一段高く石垣を積んだ上に自然石を用ひた燒死者十一名と書いた碑が建つて居る。

○(前 面) 燒死十一名之墓
明治十七年十一月廿五日我橋南岸八十五番地失火罹災死者女七 男三 丸谷高 中路里 奥田石 三宅政 池田榮 永田益 奥田松 山田勇治郎 岩崎喜三郎 奥田佐七 爲十名 先是明治十年一月十一日長谷川某亦燒死仍今併弔以碑之

(背面) 明治十八年二月廿之 戎橋北詰 圓旋人
西 櫛 町

(右側面) 教 圓

(背 面) 安永五丙申年九月廿七日
米屋長兵衛

○(東向前面) 釋 教 圓
妙 閑

(右側面) 明和八辛卯年
妙 清

(左側面) 寛政三庚午七月廿一日
五月三日

(背 面) 才屋長兵衛建之

○(前 面) 釋尼貞心信女 享保十九年
十月十三日

(臺 石) 平野屋五兵衛

と書いてある。今橋平五なら大阪屈指の富豪だつたんだが……。然し家格には不相應に貧弱過ぎる。同名異人か知ら。藝入筋では三代目市川團藏の墓が東北隅他人の墓の裏手スミクダに隠れて居る。一寸判り難い處だ。

○(北向前面) 三代目市川團藏
釋 了 西

(右側面) 文化五戊辰歳十月九日

(左側面) 辭 世

九郎右衛門町

碑面を讀んでも大體判るのであるが、尙其當時の新聞を閲すると、火元は丸谷といふ濱側の料理屋で魚寅より家を譲り受け前夜帳切祝のため祝宴を開いて騒いだ翌朝六時廿分といふに起火したのだつた。寢て居た者十三名、その内十名が燒死したといふから餘程火の廻りが早かつたものと思はれる。以前鶏松が營業の時も一名燒死、其他不時の死を遂げたものがあつた事から近所では大分評判になつて居た。明治九年竹田芝居で百餘名燒死以來の椿事だといふ。碑面の長谷川某といふ人は鶏松時代に燒死した人かも知れない。

南の隣りに中空聳ゆる供養塔あり。石玉垣をめぐらす。

○(前 面) 南無阿彌陀佛 是得「花押」
一聲稱念罪皆除

(背 面) 文政元年戊寅初冬佛歡喜日造立之耳
此碑から北向へ連つて無縁の墓が重疊して居る。前部にある花立には南米市場、奥儀と難波新地、難助の名が見える。
無縁墓中淨瑠璃三味線彈らしいのが一つ。

○(右側面) 天明元丑八月十六日
○(左側面) 行年二十五歳

俗名太右衛門
無縁墓の東手の方に十人兩替の一人米屋長兵衛の墓が二基並立して居る。聞けば米長(殿村)一家の墓は別に本堂裏手に一廡造立せられて居るとの事である。

○(東向前面) 釋 妙 存

けふもゆめ寝ても おきても

夢のゆめに 夢みるゆめの世のなか

嘗て下寺町遊行寺墓地にて所見の四代目市川團藏の墓に、どういふものか此三代目と同じ辭世の句が彫つてある。

三代目市川團藏墓のすぐ傍に門造の墓がある。年號はない。

○(北向前面) 豊澤門造墓

(左側面) 唯我自法信士

藝人の新しい處では三代目嵐壽(明治十六年歿)、嵐壽太郎、嵐三五郎(大正十四年六月五日歿)、力士では緋鯉季吉(大正五年十一月廿九日歿)などである。

大師像の浮彫をした「昇譽知嶺法子」嘉永五壬子年五月三日と誌した子供の墓側面に

永代忌日香花盆供燈明料 金三兩納

と金子まで永代に書き残して置いた處が珍らしい。

珍らしい形のは「武内氏」と彫つた擬寶珠形の墓である。擬寶珠と何か関係のあつた人かも知れない。

巡查の墓が一基ある。

○(東向前面) 故巡查黒田久次郎墓

(右側面) 以恩賜金建之

(左側面) 德譽輝秀禪定門

(背面) 明治十七年十二月廿二日大阪府巡查拜命

西風にお迎ひ

うけて散うせし

梅の花ちりし

跡まで匂ひけり

父母にさきたつことの

かなしけれと

いづれ又あふ

彌陀の極らく

ほんのふの波立いそに

よる千鳥

夕日とともに

彌陀の淨土へ

南無あみだ

佛にぞなりにけり

此世を去りて

西にぞ行く

法善寺 淨土宗、開創は慶長二年で元上本町八丁目寺町に在つた。千日へ移つたのは寛永十年であるから千日墓所が出来てからまだ十数年後であり、古參の寺院である。嘉永五年焼亡、安政二年の再建にかゝるものである。

門前に「義童勘太郎墓」「並木正三墓」「三勝半七比翼塚」などの標石が建つ。

庫裡のお墓所を通つて墓地へ出る。庫裡を南へ出た處からラツト西へ細長い場所だ。そこから手近かに無縁墓が五十基ばかり、更に西突當りには横隊行列をした無縁墓の數百基が大集團をなして居る。

義童勘太郎の墓は天海氏の書いた目印の立札があるので、すぐ知れる。其隣りに勘太郎(法名見心)と幼主彦太郎(法名見了)の合葬碑がある。左側面に「永來彦左衛門」背面に「施主永來」と誌す。三勝半七比翼塚は其北に接して居る。勘太郎の碑が金屬の額様を入れて嚴重保護を加へてあるに反し、比翼塚は周邊全く缺如し、字體の有無も定かならず、削り取られたかの様な粗面を

明治十九年七月四日死

恩賜金を以て建つとあるから何か重大事件の殉職かも知れないと思つて當年の新聞を調べたがそれらしいものは掲載されてなかつた。

肥前五島藩士の墓を三基見たので左に列挙する。

○(東向前面) 利劍院即譽是脫居士

(右側面) 文化九壬申歲十月廿六日

(左側面) 五嶋家中

俗名 江市之助

○(前 面) 利邦院往譽是生居士

(右側面) 天保十五年甲辰年六月廿三日

(左側面) 肥前國五島藩家中

武 平 太 墓

○(西向前面) 梵宇 大廓院湛然自性居士

(右側面) 慶應元乙丑年七月廿四日

(左側面) 五嶋藩

日比野五八墓

年代の古いのを搜して見ると

寛文六年

○釋 了 信

七月九日

○南無阿彌陀佛

百人念佛購

七月十五日

辭世追悼句の見當つたのを控へて置く。何れも至つて平凡なものばかりだが。

呈し、梅鉢と桐の紋だけが明瞭に見得らるゝだけである。背面には「南無阿彌陀佛」の六字の内南の一字が缺けて居る。其他墓石にも刻字はない。そして中央より横と後方へ丁字形に三裂して居る。石の缺損して居るのはどうも火災のためではないかと思はれる。三勝半七墓と傳へられて居るものが芦邊俱樂部の裏手にもある。(本誌千日前今首號參照)京都鳥邊山にもあると最近或人より聞いたが、實見せぬのでどんなものか判らない。興行に關聯した記念碑様のものが各所に存在するだらうと考へられる。

淨瑠璃方面のものが可なり多い。初代綱太夫、二代目綱太夫、豊竹岡太夫墓が同じ場所東向きに並ぶ。初代綱太夫の碑面は

俗名初代

○(前 面) 竹本綱太夫墓

(右側面) 安永五丙申年十月十三日

(左側面) 通稱平野屋嘉助

臺石に「昭和六年六月移轉に際し改造之」とあり、跌石には三基共三代目竹本津太夫、二代目豊竹古頼太夫、四代目鶴澤清六の通名、花立には六代目竹本綱太夫、竹本文字太夫と刻してある。其他の淨曲人を列記すると次の通り

○(東向前面) (臺石)

○釋 淨 音

俗名 なし伊事

鶴澤大吉

(左側面) 明和七庚寅十一月十二日

.....回忌建之

鶴澤文吉

(跌石)

○(西向前面) 寶曆九巳卯年 眞山宗清信士 閏七月十二日

(右側面) 俗名 竹本組太夫

(左側面) 明和四丁亥年 釋 尼 清 壽 九月四日

○(西向前面) 聲譽香弘宮縣信士

(右側面) 俗名 竹本上總太夫 寛延三年四月十六日

○(西向前面) 理學院誠譽一音馨利信士 爲廿五週忌追牌

(右側面) 豐竹鐘太夫墓

○(西向前面) 一宅院淨立信士

(右側面) 曲名 豐竹磯太夫 寛政四子歳三月二十日卒

○(西向前面) 前冠子嗣吉田文三郎法號 榮元院名譽顯道居士 時 寛政二季歳庚戌十二月四日罹病而歿 壽五十有九

○(南向前面) (墓石) 寛保四甲子年正月□□ 眞了性實信士 眞竹勘十郎

千日寺の南——千日曲——の名は永遠に遺されて行くことだらう。千日附近も漸く歩き盡した。では高津の墓へ移らう。

高津墓

高津の墓とは？……疑問符を投げるまでもなく、今人から忘れられて居る。町の住人でさへ新居の人なら知らぬ存せぬの一點張りは請合である。だが高津墓の一部と見るべき兆域が特殊の事情により今尙残つて居るのである。

高津墓、委しく云ふと西高津村の墓と稱する。即ち西高津村人の埋葬地なのだ。其起原を遡るに高津村の權威者高津氏族が嘗て其地領であつた西方の地を下して一族の墓地を開いたのが其最初とすべきであらう。元和の役に當り氏族は難を大和に遁れ、同三年舊地に歸來したるに、墓地は甚だしく散亂し殆んど壊滅せしめ同所に再び墓碑を造立するなど、墓所は復た整備するに至る。其後墓地管理の上から墓地の一隅に庵寺を設けて委任するに及び、庵寺の維持其他の關係より公然村の共同墓地たるを認めるに至つた。享保十七年九月西高津村庄屋彦左衛門年寄久左衛門から奉行所へ上申せる文書には、墓地の面積八畝廿一步を書上げて居る。翌十八年西高津新地の開發となり本墓地は新地区域内に包含せられて町割道路の區劃があつたけれども、墓地は依然舊態の儘を存し、延享二年始めて制定の水帳を見るも何等異動はない。同水帳の記載する所左の如くである。

西高津村墓地反別八畝廿一步
南 九間一尺二寸
六尺杖
北 十 一間

千日から高津へ

釋 寶曆癸酉九月九日 教善 觀 譽 智 清 信 女 寶曆五乙亥年八月廿五日

○(西向前面) 釋 教 圓 (右側面) 俗名 鶴 澤 又 藏

(左側面) 安永七戌戌年六月十三日

無縁墓中で一番古いのは明暦年代のものであらう。無縁墓集團場所外で探して見ると寛永三年のものが見付かつた。それから次ぎは承應三年の墓もあつた。何れも石材は花崗岩である。

○(東向前面) 寛永三丙寅年 南無阿彌陀佛 十月九日

○(南向前面) 承應三年甲午 爲妙可信女 雨露にさらされて年經し碑に 八月十六日

なき人の 今は佛と なりにけり 名斗残る 苔の下方

千日修法と千日寺——千日寺に發祥する千日の名——千日寺とは果して法善寺の謂か、竹林寺か、將また六坊千日山安樂寺の事か入祖の波瀾爲業を告げし千日寺の蹟、今はいづこに……。

東 二十二間四寸 西

田圃の中に孤立した墓地が、街の中央に閉じ込められて來たので、縮少の理由こそあれ城地の擴張は勿論許さるべくもなく寧ろ新地の繁榮と共に早晚廢止の運命にあつた。然るに此運命に拍車をかくる事件が湧き起つて來たのである。

維新の前、庵主の僧某なるもの不圖心の間違ひより奸惡を企み大膽にも墓地を擅に抵當に入れ、多額の金兩を横領し退轉して了つた。さればこれが善後策を講ずべきにより當時高津氏族が總て整理に當らるゝ事となつた。其結果此機會に於て共同墓地は擧て他に移轉せしむるの已むなきに至り、終に廢所を斷行したのである。何れの地に移轉せしかは不明であるが、距離の上から考ふるに或は千日墓地に合併したのではあるまいか。

然らば高津墓地の趾はどうなつて居るか。まづ舊位置を述べる墓趾は現南稅務署北の辻より東北へ三方引廻した所で、永く西高津村の飛地となつて居たが、明治六年十一月市區町分合に際し墓趾たる字系引庵を改稱して、高津町七番丁に編入したのである。前述の整理に於て共同墓地は廢絶したるが、高津氏族の墓所のみは移轉を留保し個人所有地として遺されて來たのである。

現壘城の西入口の門を這入ると奥の方、民家の裏手を南方へ鍵の手に擴がつた地面である。其兩側に墓碑が綺麗に並んでゐる。東南隅に地藏堂あり、堂内に四體の地藏尊が祀られてゐる。南麓の折此附近を掘り下げたので之等の地藏尊及其他墓石、骨壺類などが出て來た、それを堂内に納めて祭祀されて居るのである。

西北方東向に石造の廟堂がある。前面に立派なる拜殿と石鳥居を建て、如何にも「たまや」としての嚴かさが備はる。廟堂の横に高津氏族中興の祖橋宗達の碑がある。碑面には

○ 慶長十有
五年三月 橋 宗 達

と見え、市内に於ける此種の碑では正に最古に屬すべきものであらう。宗達は高津社創祖伊豫權守橋朝臣良基の直系に當る方である。以前刻面磨滅して甚だ不明瞭なりしを南焼のため火焰に包まれて表面剝落のため反つて刻字鮮かに顯章したのだといふ。

宗達碑に接して次の古碑がある。

正保三丙戌年九月八日

○ 釋 宗達 妙了 妙智
妙閑 妙收 春了

元祿二己巳年九月八日

(左側面) 釋 休 意 教 清 教 意
元祿四壬未年 延享十四年 延享三丙申年
十二月十五日 九月廿二日 五月廿六日

(右側面) 妙 意 妙 尊 妙 清
享保十六年辛亥年 享保七壬寅年 元文五庚申年
十一月十三日 七月十一日 七月五日

北東端に在るのは智圓法師の碑である。

○ 釋 智圓法師墓

(右側面) 安永九戊子年三月廿五日



地墓田高たつあに側東る入に道街吉住らか宮今

(左側面) 行年三十五歳
智圓法師は高津町一番丁表門筋松屋町北(現説教所)に在つた眞宗道場の住僧であつた。法師の死について一條の物語がある。

法師が或日いつもの如く勤行に餘念なき時、讀經の切れ目を何氣なく檀上の如來を拜すると、不思議や尊體は前方に傾いて倒れかゝつて居られる如く見えた。で氣がよりになつた法師は本尊を下して其足裏を剃刀で削り取つて漸く正位に安置することが出来た。

その翌夜には法師はもう此世の人でなかつた、のみならず一家残り同時に黄泉に旅立つて行つたのだ。その死は道場に押入つた兇賊の毒手に犠牲となつたのであつた。けれども人々は本尊と法師との因縁の何物かに結び付けて了つた。高津氏族一統は道場と公私關係の深かつた故を以て、法師の非業の死を憐み懇ろに本地へ葬むつたのだといふ。

因に本如來は昔、顯如上人信長と戰の時紀州への途次高津氏族が撰迄警備申上げし記念として親しく上人より賜はりたる由緒あるものである。明治初年道場の廢する際圓成寺(高津町一番丁高津氏族系統)に如來を移し、氏族一同の守護佛として現在尙同寺に奥深く奉安せられて居る由である。

高津の地、今は高津村、高津新地の名失せて高津町の名に於て新しい展開を續けつゝある。さらば千日、高津の墓よ。

飛田から阿部野へ

梅原忠治郎

飛田の墓があつた舊址はと、物知り顔のおつさんに尋ねたら、あの歡樂境の飛田遊廓のあるとこだよと教へてくれる。常人はフン成程とはまり易い錯覺だが、此はトンダ大違ひだ。

擬古圖を披いて見ると、紀州街道の今宮一里塚のあつた地點から少しく南に、東南へ斜に阿部野街道へ上る道がある。此道に沿ふて北寄り一帯が墓地で、南寄りに仕置場のあつた所だ。今宮村字八田、現在は西成區八田町及び南へかけて東田町である。此地域六七反ばかりもあつたらう。主として天王寺方面及び近里の人を葬る。またその東は高卒都婆墓所とて、參畝歩許り(凡そ百坪)の小區域では、有縁無縁一切衆生供養の卒都婆の意で、非人乞食行倒人を埋めたと云ふ。外に「内院の墓所」と誌したのは何所か此名は都卒の内院から發したもので、彼の秋野坊の墓所が、今のラヂウム温泉の南方邊だと傳へるから此の同地點か。

是より本海道に出る

今宮村壹里塚あり、出駕籠有

水茶屋 一里山又右衛門(外四軒畧)

此間西手に木津村はか有、東手を高田といふ垣外長史非人のか